

伝文

日本口承文芸学会会報
第6号 1990年3月

発行 日本口承文芸学会
〒114 東京都北区西ヶ原4-51-21
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所内川田研究室気付
電話 03-917-6111 内線 384
(水曜日午前10時～午後5時まで)

〈学会への提言〉 『日本昔話通観』の完結によせて

福田 晃

昨年12月、北海道(アイヌ民族)編を刊行して、『日本昔話通観』28巻は完結した。1977年10月、京都編を出して、まる12年の歳月を要している。これがたいへんな労苦のたまものであることは、来年定年を迎えられるという稲田浩二氏の白い髪と深い皺に象徴されると思う。第28巻の『昔話タイプ・インデックス』は勿論、伝承資料を網羅的に収載したそれぞれの巻を含めて、今後の研究者に寄与するところははかり知れないものがある。

そこでふり返って『通観』の特徴を関敬吾氏の『日本昔話集成』と比してみるに、それは『集成』が戦前(昭和20年以前)の伝承資料を中心にするというのに対して、『通観』は、むしろ戦後の採集資料を大幅に増補し、むしろそれを中心として編集しているという点あげられる。それも厳密な伝承資料、つまり語りをそのままに翻字するものによっているということに大いなる特徴が見出されるであろう。戦後の昔話調査が、民話の再創造のうねりに抗して、語りのままを記録することに、伝承資料の厳密さを期したことと、テープ・レコーダーの普及で、その記録が容易になったという事情も重なって、そのことを可能ならしめたのであった。その意味で、『通観』はわが民族の大いなる遺産を集成したことにもなったのである。

それにもかかわらず、この秀れた『通観』の利用の方法を間違えてはならないと思う。それは関敬吾氏の『集成』および『大成』についても同じことであるが、これらがめざすものは日本における昔話を大系的に把握しようとするものであり、個々の昔話の伝承分布を通して、その話型を求めるものであって、伝承そのものの研究をめざすものではない。しかるに、近年の伝承研究に、この『通観』が安易に利用されていることが少なくない。

昔話研究の大きな分野に伝承研究のあることは言うまでもあるまい。そして、その方法にまずフ

ィルド・ワークがある。フィールド・ワークによるならば、われわれは文字化された資料が、いかに語りのままの翻字であり厳密性を主張されたとしても、それはもはや伝承そのものではないことを理解するであろう。しかも伝承は一回きりのものではなく、重層性・重複性を有するものである。しかるに、昔話の翻字・記録は、たとえ選ばれた伝承とは言え、一時点のそれにとどまることを留意せねばなるまい。

伝承研究が次に頼りとするのは、民俗誌などに留められた伝承記録であり、一定の地域に則した民間説話の報告書であろう。われわれは、フィールド・ワークの体験にそうならば、前者から当地域の民間に息づく昔話伝承を相応な「語り」に還元できるであろうし、後者からは解説の伝承状況報告とあわせて、当地域の民間説話伝承の総体のなかに重層する昔話話柄を「伝承」そのものに近づけることができるであろう。『集成』『大成』や『通観』収載の伝承資料もこれに準じた手続きによって利用されるべきである。

過日、京都の一夜、岡山の立石憲利氏と語り明かすことがあった。わたくしの採集の先達である立石氏は、昔話の時代が決して終わっていないこと、『通観』後も採集調査の続けねばならぬことを熱っぽく説かれた。また昨秋、浜松の説話・伝承学会大会で、東北大学で国文学を専攻する院生、氏家千恵さんによる昔話の研究発表を聞いた。民間文芸などを国文学の研究対象とは認めてこなかった東北大学文芸学派の流れに立つ氏家千恵さんが、自らのフィールド・ワークによって、パフォーマンスとしての昔話の意義を感動的に論じられた。この立石氏の意見、氏家さんの発表は、わたくしには『通観』以後の主要な研究課題を示唆するように思われてならないのであった。

(大阪府寝屋川市)

「関敬吾先生を思う」

会長 川 田 順 造

去る1月26日、関敬吾先生が天寿を全うして長逝された。先生は私たちの学会の創設者の一人であり初代の会長であったが、学会という枠を越えて私たちにとって大きな導きの星だった。

先生は対話の名手であり、対話によって蒙を啓き、相手からよりよいものを引き出す達人だった。そこには学び、究めることにおける真の弁証法があった。とぼけた“関ぶし”には、頂門の一針というべき鋭い批判がこめられていた。

先生の学問は、日本に深く潜入しながら、常に外の世界に向かって開かれていた。方法においても、昔話のモチーフなどの比較という面でも、これほど外国の文化に対してこだわりをもたない民俗学者も稀だったのではないか。海外の新しい理論にも広い理解をおもちだった。その自由な発想から、先生は、語りにおける仕草、

語り手、語りの場、昔話と通過儀礼等、次々に刺激にみちた先駆的な問題提起をされた。その底を貫いていたのは、昔話の社会性に対する先生の変わらぬ関心だった。

関先生は、終生在野の学究の気概と、新鮮なアマチュア精神を失わず、妥協を排し、だが飄飄と90歳の人生を生き抜かれた。研究者が“専門家ぶる”ことの愚かしさを、先生は身を以て私たちに示された。

学問においても、研究者としての生き方においても、関先生が遺されたものをどう受け継いでゆくか、それが私たちに与えられた課題だ——などと力んだ口をきけば、「言うだけ言っても、実行しなければ何にもならないですよ」と、例の調子での辛辣な一言が、先生から返ってきそうな気がする。

第1回研究例会

高 木 史 人

1989年度第1回研究例会は、89年10月14日に開催された。

石井正己氏の「盲僧の八人芸」は、従来、等閑視されていた八人芸をたんねんに史料、民俗資料を発掘して紹介したものである。八人芸とは1人で8人分の楽器や声をあやつる芸である。現在では座敷芸として東北地方にのこっているそうだ。石井氏の発表では実演をビデオで紹介し、あわせて中国の事例も報告された。これは映画の中に登場したもので、観客が芸人にもっといやらしい芸をせよとリクエストしていた。日本では「岩見重太郎の狒々退治」や「馬鹿息子・瓶の尻」等を演じたという。色話はどうだったのか。また、八人芸は観客の目に触れないように帷帳の中で行なうのだそうで、石井氏はここに宗教的、呪術的要素を感じているが、私はその仮説が一つの「物語」としてどれほど有効か、と考える。

次に依田千百子氏の「神々の競争——朝鮮の創世巫歌とその構造」だが、これは朝鮮半島の巫者

が伝えていた創世神話の文字化資料を精密に分析し、また日本にある類似の資料（たとえば宮古島の「ミルクポトケとサクポトケ」や『遠野物語』等の花咲かせ競争モチーフ）とも比較検討した発表であった。それによると朝鮮半島の創世神話は自然界の秩序を説く第一段階と、文化の秩序を説く第二段階と「無秩序→秩序」が2回くり返される構造になっているようだ。また、文字化資料は大きく北部型と南部型とに大別されるようだ。依田氏はさらに文献資料（『三国遺事』等）にも説き及んだが、発表時間に制約があって意を尽くされなかった御様子だった。

当日、韓国と中国とから研究者がみえていたが、石井氏発表途中で中座されたのは、仕方がないこととはいえ、両氏の発表とも地域的に関係があっただけに残念なことであった。（東京都板橋区）

.....
なお、第2回研究例会は、90年3月17日に、中央大学駿河台記念館にて開催され、報告者は、鈴木満氏『『小クラウスと大クラウス』から民話『馬喰八十八』まで』と、松原孝俊氏『『手無し娘』のふるさととは？——グリム童話と朝鮮半島——』であった。詳細は本誌次号に掲載予定。

〈仲間たち〉

奄美沖縄民間文芸研究会

岩瀬 博

昭和52(1977)年6月に発足。その前史は昭和48年に遡る。山下欣一氏の導きによって、福田晃氏と私が大谷女子大学学生を伴い、徳之島の昔話調査を行なったことに始まる。以後、沖縄与勝諸島、国頭、宮古、八重山の調査を行ない、南島研究は本土びと、奄美びと、沖縄びとの連係が必須であることを痛感し、三者を結集して設立。毎年、夏を中心に奄美、沖縄の昔話調査を行なっている。会員は約150名。

調査の成果は、本土びとと南島びととの共同により、方言と対訳による『南島昔話叢書』全10巻(同朋舎出版刊 現在刊行中)にまとめ、さらに、あらたなるシリーズを企画している。

研究は、年1回の大会、例会を行なっている。大会は2、3年ごとに一度、南島で開催することを原則としている。

南島での大会は、第1回を昭和55年8月、南海日日新聞、奄美郷土研究会の協力を得、名瀬市で、開催。その成果は『南島説話の伝承』(三弥井書店)として刊行。第2回を昭和60年8月、沖縄の民俗研究会、芸能史研究会、オモロ研究会との合同研究大会を那覇市で、開催。その成果は『琉球文化と祭祀』(ひるぎ社)として刊行。第3回を昭和62年8月、奄美民俗談話会の協力を得、名瀬市で開催。その成果は『奄美文化の探究』(海風社)として刊行を予定。第4回は平成元年8月、宮古の郷土史研究会・民話の会・八重干瀬の会との宮古文化合同研究大会を、平良市で開催してきた。

本土での大会、例会は関西を中心とするが、東京でも、「伝承文学研究会」の他、「古典と民俗学」との共催で行なってきた。

調査、大会、例会を重ねるたびに、仲間の輪が広がっていくことは頼もしいかぎりである。南島の大会はもちろん、本土での会に奄美、沖縄の郷友会の一般市民が参加するのも楽しい。

(連絡先：〒584 大阪市富田林市錦織志学台

大谷女子大学 岩瀬博研究室内)

会費納入のお願い 1989年度会費未納の方は、至急納入をお願いします。本会の会費は4,000円です。

〈こ え〉

「くずれ」—近世の在郷武士の日記から—

永井 彰子

かつて北九州を中心とした玄清法流の盲僧が、檀家をまわり琵琶を弾きながら地神経などをよんで荒神祓いを行っていたことがよく知られている。この回檀法要のあとに、余興として語る段物・端唄・滑稽話など、いわゆる「くずれ」と称する芸能も、当時の人々にとって楽しみであったという。現在「くずれ」の台本も残されてはいるけれども、もともとは口頭で伝えてきたものであろう。

このような芸能の担い手たちと、それをよろこんでむかえ入れる人々とのかかわりを知る上でも貴重な史料を提供してくれるのが「正房日記」である。筆者である加藤正房は、福岡藩の大老、三奈木黒田家の玄関番(士分)であったが、父の急死後、知行地である下座郡三奈木村に住み、延宝より元禄までの在郷武士の日常生活を克明に記している。正房の身边には、座頭・警女・寺中・念仏・人形遣い・説経・美麗・舞々・浄瑠璃語りなどの芸能者が往来し、小唄・説経操り・浄瑠璃・踊・舞・謡・拍子・仕舞などの多彩な芸能を、三奈木村の人々ともども愛好したさまがうかがえる。

なかでも注目したいのは、天和3年12月に嘉麻座頭が語った「崩」である。この場合の「崩」は「大坂崩」をさしており、今のところこれが「くずれ」の初見である。「大坂崩」は人気を保ち続けたとみえ、天保頃には筑後・筑前・豊前の琵琶弾坊主が、大坂崩・長門合戦・姫路合戦をうたっていたという(「三国名勝図会」)。こうしたことから考えても、「くずれ」の語源は戦記物を語ることにあり、それが取りもなおさず盲僧の本来の業である死者の御霊鎮魂の業であったのであろう。

盲人芸能者が携えて歩いた説話・合戦譚などの語り物は、在地性をもって村人の中に深く浸透して育てられ、変容しながら根を下ろしていったにちがいない。近世の三奈木村にも、口承文芸の土壌ともいえる空間がたしかに存在していたことをこの日記を通して垣間見ることができる。盲僧が語り伝えてきた「くずれ」は、やがて明治に至って工夫・改良を重ねた結果、筑前琵琶として新しい花を開かせるのである。

(福岡県地域史研究所 福岡県福岡市)

新刊リスト

- 口承文芸資料集・3(北の語り), 4(北の語り) 北海道口承文芸研究会 88.1 89.1 (寄贈)
臆病者を友だちにするな——パキスタン・バングラデシュの民話 M・スチール他 頸草書房 88.
森と川の神話——奥アマゾン・ピロ族の世界 リカルド・アルバレス 文京書房
双書フォークロアの視点1「河童」 大島建彦編 岩崎美術社 88.
世界の昔ばなし24 王子と美しいパセリちゃん——スイスの昔話 竹原威滋編・訳 小峰書店 89.3
(寄贈)
運命の女神——その説話と民間信仰 プレードニヒ 竹原威滋訳 白水社 89.8 (寄贈)
深浦の民話 津軽民話の会 89.10 (寄贈)
津軽の民話・5 津軽民話の会 89.10 (寄贈)
老人の知恵に学ぶ——母村宇奈月の生活と文化(口承文芸) 久保孝夫 函館大妻高校研究集録「おおつ
ま」・3 89 (寄贈)
口承文芸の世界——日本とヨーロッパの昔話を中心に 北大放送教育委員会編 89.9 (寄贈)
浦島太郎の文学史——恋愛小説の発生 三浦佑之 五柳書院 89.11 (寄贈)
山深き遠野の里の物語せよ 菊池照雄 梶社 89.6
東アジアの創世神話 君島久子編 弘文堂 89.9
昔話の年輪 稲田浩二編 筑摩書房 89.11
韓国人と諧謔 張徳順 梁民基他訳 素人社 89.4
チャチュンピ伝説 金仁顕 工作舎 89.3

第14回大会のお知らせ

日本口承文芸学会第14回大会は下記の要領で開催されます。ふるってご参加ください。

場 所 愛媛県松山市 愛媛大学構内

期 日 1990年6月2日(土)～6月3日(日)

内 容 公開講演 森 正史氏/小島美子氏

研究発表

シンポジウム テーマ 「文字と語り——口承文芸の直面する諸問題」

会員総会・懇親会・見学会

訃報

関 敬吾氏(東京都) 平成2年1月26日にご逝去

岡見正雄氏(京都府) 平成2年2月6日にご逝去

謹んで、ご冥福をお祈り致します。

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求ください。入会金 1,000円、年会費 4,000円。
入会申込書請求・送金先：〒114 東京都北区西ヶ原4-51-21 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化
研究所川田研究室気付 日本口承文芸学会事務局 (TEL. 03-917-6111 内線 384・水曜日午前10時～
午後5時まで) 振替：東京 8-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan, % Prof. Junzo Kawada, Institute for the Study
of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo. University of Foreign Studies, 4-51-21
Nishigahara, Kitaku, Tokyo, 114, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください